

ネット de ひでさん塾
<第 11 回：2012 年 1 月 10 日発行>

2012 年、新年のお慶びを申し上げます。昨年から取り組んでいる課題のひとつに、漢方に興味のない先生や漢方をほとんど処方したことのない先生に、漢方の本質や使い方をどのように教えたらいいかということがあります。そのひとつの答えを今年の 2 月に発行されます「漢方と最新治療」の、「特集：漢方薬と西洋薬の併用」の分担執筆に書いてみました。私が漢方を使い始めてから、一貫して考えていることは、漢方と新薬は決して対峙させて比較するものではなく、どちらも科学的にみると同じ土俵に乗っているということです。ですから、私の頭の中には「併用」という意識すらないのです。まだ、発行前ですので全文は紹介できませんが、考察の一部を紹介します。

傷寒論に記載されている方剤は、そのレシピが現在もそのまま使われており、その作用機序についても、動物実験を通して、漢方薬が初期免疫に強力に介入していることが次第に明らかになってきている。漢方薬の薬剤としての特徴やその卓越した作用機序は西洋医学的解明によって初めて明らかになる。漢方医学の体系や理論は現代科学が誕生する以前に構築されたものであるから、必然的にその基盤に現代科学の方法論は一切使われていない。

西洋医学の知識だけを使って漢方薬を臨床の現場で活用するためには、漢方薬という薬剤を科学の土俵に乗せる必要がある。西洋薬が基本的に単一の化学物質からなっているのに対し、漢方薬は多数の化学物質からなっている。従って、漢方薬の作用機序を説明するのに、単一の化学物質を前提とする従来の薬理学的手法は使えない。超多成分系の薬剤がシステムとして生体内でどのような効果を発現しているかを探る新しい方法論が必要となる。分子イメージング法を使いPETなどを使って、生体内での漢方成分の分布を追跡するsystem biology的な手法の応用が考えられる。

五苓散の作用機序に関するアクアポリンの役割に関する研究を始めとして、漢方薬の作用機序に関する科学的究明が加速度的に進んでいる現状を考慮すれば、漢方薬を科学の土俵で論じることはごく一般的になっている。西洋薬も漢方薬も同じ化学物質なのであるから、それらの使い分け、効果的な併用法の追究が、世界医学のさらなる発展に多大な貢献をすることになるであろう。

さて、今回はこのような考え方に基づいた当院での研修を受けられた先生方の研修体験記特集としました。

研修体験記（溝口哲弘先生）

この度は静内病院での漢方研修を快諾していただきありがとうございました。1カ月に満たない研修でしたが、非常に楽しく、勉強になり、いい経験ができました。静内病院で漢方研修をしようと思ったのは、約2年前に浜松で行われた井齋先生の講演会でした。その講演会の中で、炎症と微小循環を基礎として病態から漢方を捉えるという我々西洋医学を学んだ者にとって、分かり易く取り組みやすい考え方で漢方を論じており、一度先生の下で勉強させていただきたいと考えていたことでした。

今回の研修で学んだこととして

1. 井齋先生の外来姿勢

もともとの井齋先生の医療に取り組む姿勢や雰囲気もあると思いますが、面接技法なども学んできたということに反映されたもので、アメリカ式に立って患者さんを待ち受け、患者さんの様子を観察しながら、目を見て話をじっくり聞き問診をする。2分間は黙って患者の話を聞くということで、信頼関係を構築していることがよく分かりました。不安を抱いて暗い顔をしてやってきた患者さんが、診察が終わるころには穏やかな顔つきになって帰って行く姿が印象的でした。漢方薬を含めた治療効果への満足もあると思いますが、患者さんを納得・安心させ、信頼関係が築いているから軽い症状でも遠方から受診される患者さんも多数いることが納得できました。

2. 新しい漢方の考え方

炎症の主座がどこにあるのか、病態的に考え、治療の西洋・東洋にこだわらず、必要なものを使うことで患者さんの治療奏効に役立っていて、説得力のあるものでした。丁寧な問診・診察で治療薬を決めておいて、診察で確認するというのは普段行っている頭痛の診療と相通ずるところがあり、「腹診・脈診は特異度が低くて、それをしてから方剤を決めるという思考過程はナンセンス」ということも方剤決定の際に迷いを生じていた自分にとって非常に納得のいくものでした。皮膚科で難治性疾患とされる「乾癬」も微小循環障害という病態

論から治療薬を決定し、わずか数日で軽快したのも圧巻でした。感冒やウイルス性胃腸炎の漢方ならではの治療の切れ味のよさもよく分かりました。

3. 鍼灸治療

空いている時間に鍼灸師の工藤先生の鍼灸治療を見学させていただき、鍼治療で脈の触れかたが大きく変わることを体験させていただき、実体験で鍼灸の人体への影響が納得できました。また、鍼灸的な観点からのお話も聞けて、非常に楽しい時間でした。

4. 脂質栄養

井齋先生が脂質栄養に詳しいこともあり、院内講演の資料をコピーさせていただき、勉強させていただきました。北海道の食材がおいしい理由もわかりました。

生活の上では、妻・娘を連れていったため宿舎や家具なども手配していただき、週末は病院の車も貸していただいたため、静内での生活を満喫させていただきました。北海道で魚が美味しいだろうと予想していましたが、野菜も非常に美味しく非常に印象的でした。

井齋先生の講演会を聴講するとその魅力が分かりますが、実際にどのように使われているかも含めて、陪席するとよりその良さがわかると思います。漢方に興味をもつ人たちは、一度井齋先生のもとを訪れることを強くお勧めします。臨床をする上で大事なことを多く得られると思います。

最後に、色々ご指導いただきました井齋先生、外来のサポートをいただいた西原先生・平良先生等の諸先生や看護師の皆さん、鍼灸指導していただいた工藤先生、諸手配をしていただいた狩野さん・藤井さん等の事務の方々、静内病院で学んだことを今後の臨床に役立てていきます。ありがとうございました。

研修体験記（尾形マリ先生）

精神神経科の勤務医の尾形と申します。研修の内容やタイムテーブルなどについては沢山の先生が詳細にレポートして下さっているので、私は具体的な症例を中心に御報告したいと思います。

まず研修初日。夜診を終えたばかりの井齋先生に病棟から連絡が入りました。熱発です。病室に入ると、伏せ目がちで表情に乏しい高齢の男性がいらっしゃいました。初対面の私は普段からこのような感じの方なのかな、と思いました。

先生は患者さんを見て「顔が赤いね」とおっしゃり、それから額に触れ、声をかけ、「そんなに元気が落ちてはいないなあ。よし」と話された後詰所に戻り、桂麻各半湯を 4 時間ごとに服用してもらうよう指示を出されました。翌朝。看護師さんが笑顔で「熱は下がりました。」と温度板を見せてくれました。病室に行くと、昨夜の患者さんの頬の赤みがすっかりとれ、先生が声をかけると、前夜とは別人の様な表情でにっこりと微笑まれました。よほど気分が楽になったのでしょう。

別の日。80 代後半の女性、右半球広汎におよぶ脳梗塞で JCS 3 0 0。ご家族は、予後が厳しいことを御理解され、静内病院で出来る範囲の治療を受け、あとは静かにお看取りをすることを希望されました。そこで井齋先生がなさったのはマーゲンチューブから小柴胡湯合五苓散フルドーズ投与。脳の浮腫と炎症を抑える方意だそうです。翌週、回診にお伴すると、何とその患者さんは目を開けてはっきりと「おはよう」と話されていました。

高熱で受診され急性前立腺炎と診断された中年男性。泌尿器科の先生によると、抗生剤の点滴が必要だが前立腺は組織移行が悪いのが困るところとのこと。井齋先生「じゃあ、抗生剤が届くように微小循環を改善させて、泌尿器系によく効く強力な抗炎症薬も使おう」と、桂枝茯苓丸合竜胆瀉肝湯フルドーズ処方。めでたく軽快し、後日退院時処方切れて外来に見えた患者さん曰く、「先生、漢方出してよ。あれ飲まないとなんだかさみしい」。私は「竜胆瀉肝湯」という方剤名を聞いただけで口が苦くなりそうなのに、それを「飲まない寂しい」なんて、きっと、一服飲むごとに楽になって、飲みごたえにふさわしい手ごたえがあったに違いありません。

これらの症例でもお分かり頂けますように、井齋先生は必要とあれば合方もされます。風邪のひき始めなどの比較的単純な病態ならともかく、症状が重い時や経過が長引いているとき、さらに西洋薬の治療もからんで病態が複雑になっている場合などは、保険適応エキス剤の中でひとつだけ、その「正証」に当たる方は必ずしも多くないように思います。こうした患者様一人一人に合わせた治療をするためには、保険適応エキス剤をいかにうまく組み合わせるかも勤務医の腕の見せ所ではないかと思います。私は勤務医なので、保険適応エキス剤 150 種類以上を全て揃えた静内病院で勉強できてとても良かったです。

ところで、井齋先生は漢方を使う使わないにかかわらず、一人ひとりの患者さんの性格やタイプを鋭く見抜きそれに沿って診療をされます。また、どんな

に小さいお子さんでも、どんなに高齢の方でも、必ず御本人にお話をされます。障害のため全く言語的な疎通が取れない方がけがをされ、施設の方に連れられて見えた時も、ご本人に説明をされ、縫合器具を見せながら逐次どんな処置をするかを話され、無事治療終了。日ごろお世話をされている施設の方は「病院に来てこんなに大人しくしているのを見たことがない」と驚かれていました。私は正しい方剤を選ぶことばかりに気を取られていましたが、こういう診療の仕方を見ることができたことも本当に勉強になりました。

私は曜日を決めて一年間お世話になったので、定期的に通院されている患者様の経過をずっと見ることができました。アトピーの若いお嬢さんの、痛々しくひび割れて血がにじんだ手が、温清飲と滋陰降下湯でどんどんふっくらと柔らかい手になり、お嬢さんの表情が明るくなって行くのを見るのは人ごとながらとても嬉しいものでした。

他にもいくつかご紹介すると

中年男性、問診票に書かれた主訴は「全身の痛み」。井齋先生は、全身が痛いというのは必ず心に何かあるね、と私たち見学者に話され、診察開始。主訴を始め一般的な体調を聞きながら、それとなくお仕事の様子などを訪ねられました。先生の間診の特徴は絶対「詰問調にならない」ことです。「診断のための機械的な情報収集」や、「いかにも探ってやろう」という感じではなく、患者さんに温かみのある関心に向け、自然な会話をするうちに患者さんの方がどんどん立ち入った話をされます。この方の場合、はたから聞くと生活に結構色々な変化があった様なのですが、ご本人はそれをストレスと自覚されていない様子。処方は抑肝散 2 週間。2 週後その患者さんが診察室に入って来られた時、私は哑然としました。初診時硬く暗い表情をされていた方が、別人のようににこにこされているのです。一瞬その方と似た別の方かなと思いました。調子は「あんまり変わらないです」と話されつつも、声のトーンや話し方もまた別人のようでした。

中年女性。目鼻立ちのはっきりした綺麗な方ですが、流行のメイクのせいでしょうか、目元に緊張感があります。御自身とご家族の体調不良が重なり、激やせしてしまいました。食べたいけれど食が進まないとのこと。処方四逆散。一か月後。ほおがふっくらし、驚くほど目元がやさしく、表情が柔らかくなっています。美人度アップです。

以上は数知れない貴重な経験のごく一部です。ある漢方製剤のメーカーの MR

さんから、井齋先生のところに行きたいのだけど遠慮されている先生が沢山おられると伺いました。井齋先生の漢方普及への御尽力の様子は他の先生も書かれている通りです。一人でも多くの医師に、そして患者さんに漢方をという井齋先生の情熱にどれだけ励まされ触発されたかわかりません。先生がこれほど漢方を広めたいと願っておられるのに、どうして遠慮が必要でしょうか？また、実習をするには漢方の基礎知識が不足していると謙遜して研修をためらわれている先生もいらっしゃるらしいのですが、それも心配御無用です。私が井齋先生のもとで漢方を勉強したいと思った大きな理由の一つは、先生が移植に携わっておられたということです。大変生意気な言い方で失礼なのですが、免疫系というシステムが生体でどんなことをしているのか、あるいはときにどんなことをやらせてくれるのか、それを目で見えて手で触れて来られた先生の漢方観に魅力と説得力を感じたのです。実際、漢方薬を、免疫系に働きかけ、また強力かつ西洋医学の薬にない抗炎症作用を発揮する薬剤ととらえ、ある方剤が、体に、細胞一つ一つに何をさせているかをイメージさせてくれる先生のお話は、組織解剖や病理学が好きだった私にはとてもインパクトがあり解りやすいものでした。井齋先生のお話を伺っていると、現代西洋医学的な病態の解釈と方剤とのつながりが見えて来ます。軽微な初期の感冒から肺炎に至るまで、呼吸器感染症の治療に際して、炎症の主座がどこにあるかで方剤を決めていく井齋先生の方法はとても実践的で、傷寒論の条文が暗記できておらず自信がなかった私でも以前より積極的な処方ができるようになりました。

井齋先生は「漢方の専門用語」を臨床現場では殆ど使われません。それは、先生が、世界中の医師の共通言語で東洋医学を共有しようとされているからだけでなく、先にも述べたように患者さんとのコミュニケーションを何より大切にされているからでもあります。私が漢方を使っていて苦労していることの一つに患者さんへの説明の問題がありました。井齋先生の説明を伺っていて、わかりやすいなあと思いながら、ふと、患者さんへの説明は患者さんのためだけでなく、何より自分のためになることに気付きました。患者さんに解り易く説明するためには、説明が納得のいくもの、論理的で矛盾がないものでなくてはなりません。そのような説明がつくと言うことはすなわち診断が正しいということであり、説明に困るような場合は診断や治療方針のどこかに矛盾があるかもしれないということです。このように、色々な面で自分の診療を反省する機会が得られてとても幸せでした。

講演に行かれた先生方をご存知のように井齋先生はいつもユーモアたっぷりですし、私が初歩的でとんちんかんな質問をしても、的外れな意見を言っても、おおらかに受け止め、それどころかそこから話を発展させて考察を深めて下さるので、本当に楽しく研修できました。私自身、図々しい性格とは言え、井齋先生や静内病院のスタッフの皆様、患者さんにお世話になりすぎだなという気持ちはもちろんありました。しかし、それもこれも全ては自分の患者さんのためです。

長くなってしまいましたが、これでも数々の有意義な体験のごく一部です。多くの先生方に静内病院での楽しい研修を体験して頂けます事を願っております。

研修体験記（金子正和先生）

神奈川県横浜市で内科医（専門神経内科）をしている金子と申します。数年前に横浜で行われた井齋先生の講演会に参加させていただいた時、西洋薬のように漢方について話された井齋先生がとても記憶に残っていました。以前から西洋医学では手におえない症状にも効果のある漢方に興味があり、一時期頻回に諸先生方の講演会に足を運んでいました。しかし、講演会ではわかったつもりになっていても実際外来診療になるとイメージがわからず処方に難渋し必要性は感じながらも東洋医学的に考えていくというところで挫折して、結局漢方から遠ざかっていました。

この度転勤を機に以前漢方研修に参加された西岡先生の推薦もあり5日間という短期でしたが、井齋先生のご厚意により漢方研修を受けさせて頂きました。旅路は、講演会で東京にいらっしゃっていた井齋先生と同じ飛行機で千歳空港まで行き、そこから静内病院までの車に同乗させていただきました。お疲れのところたいへん恐縮でしたが、いろいろと質問をさせていただき、漢方の利点や抗炎症作用について、またサイエンス漢方などたくさんのことを教えていただき、さらには日高の土地の観光案内までしていただきました。北海道に来るまでは冬の寒さにしりごみをしていましたが、室内は暖かく快適で、院内にある研修医用部屋はバス、トイレ、テレビ付で広いビジネスホテルのようでした。

実際の研修は、井齋先生の診療について勉強させていただく形で行いました。月曜日から金曜日までの午前（受付8時30分から12時まで）、月、水曜日の夜診（受付16時30分から19時まで）の総合診療科陪席に、火曜日午後には在宅往診、

水曜日午後は療養型病棟回診、木曜日午後は障害者病棟回診につかせていただきました。その他の時間には井齋先生の講演会の DVD や先生がまとめられた栄養学資料もいただき勉強させていただきました。

まず外来診療で井齋先生の姿勢に驚きを隠せませんでした。患者さんの入室時には必ず立ちあがって御自身でドアをあけられ、車いすの方であれば先生御自身が車いすを診察室まで押していかれ、歩行可能な方であれば患者さんの上着をハンガーにかけることもされていました。決して看護師さんに任せることはせずに。患者さんの入室前に問診票に目を通し、入室時には望診をしっかりし、聞診から key words を探して処方薬を選択し、そして、会話からこの処方の確認作業をしていらっしやいました。さらに診察終了後は御自身で事務処理までされていました。「患者さんがここまで来るのはたいへんですし、時間がかかれば患者さんを待たせてしまいますから。」とおっしゃっていました。まさに患者さん主体の診療に魅せられ心を動かされました。多くの訴えから key words を catch するという Catch the key words! を大切にされ、東洋医学独特の術語を使用せずに御指導していただきました。いろいろな急性期に漢方が著効することにも(通常量の 2~3 倍)衝撃をうけ、漢方薬効の中心が免疫系を早く立ち上げる抗炎症作用であると実感いたしました。

陪席につかせていただいた時に漢方処方されていた疾患は、心不全、慢性前立腺炎、急性腰痛、慢性腰痛、三叉神経痛、咽頭痛、鼻汁、耳鳴り、副鼻腔炎、月経前頭痛、アレルギー性鼻炎(高齢者も)、にきび、食物アレルギー、めまい、夜間のひどい咳、肩こり、五十肩、手足の冷え、膝痛、腹痛、高血圧、便秘症、しみ、尋常性乾癬、帯状疱疹後神経痛、頭痛、皮膚疾患、ふらつき、後鼻漏、頭痛の訴えが主の感冒、おでき、こむらがえり、脂漏性湿疹、肩痛、坐骨神経痛、掌蹠膿疱症、まさにメモの証(半夏厚朴湯)の方などなどでした。また病棟では、尿路感染症、高齢者の嘔気、高齢者の食欲不振、ウイルス性上気道炎の発熱、脳梗塞、便秘症、膝痛、下肢浮腫、湿性咳嗽、喀痰などで、病棟でも感染症が多く、早期に発見し漢方を含めて治療をすることの重要性を見せていただき、その他、褥瘡、外傷の治療など漢方以外の患者さんの治療に対しても同じように御指導していただきました。

漢方教育のあり方を根本的に変えていき、特に漢方に精通していない漢方非専門医でも処方可能な漢方を広め、エビデンスを求めるサイエンス漢方をという姿勢で年間 80 回以上もの講演会や大学の講義をされており、それでいて診療

では、西洋漢方医学の片方に頼るのではなく、必要に応じて西洋医学治療をしたり、漢方治療を取り入れたり、または両方とも併用するというまさに全人的医療を実践されており、井齋先生にはただただ感心するばかりでした。井齋先生の key words をとらえていく漢方診療はわかりやすく、そして効果があり、敷居が高い漢方東洋医学的思考法をマスターした漢方専門医だけではなく、西洋学を中心に勉強してきた自分のような者にもそのままを取り入れ行うことができると感じました。

帰りも井齋先生と同じ飛行機で羽田まで行き、三田で開かれた風邪のアルゴリズムの講演会に参加させていただきました。内容は半分以上経験させていだいたもので、研修時の患者さんの声を思い出しながら拝聴できました。今後、自信を持って処方できると思います。

おしげもなく御指導していただき、有意義で貴重な研修をさせていただき忘れることのできない時間を過ごせたことにたいへん感謝いたします。さらには漢方研修だけではなく、臨床医、先導医、教育者としての姿勢に非常に感銘を受け、自分にとってとてもいい刺激を与えていただいたことも大きな財産となりました。今後自分が、漢方の素晴らしさを患者さんに実践できるように努め、たくさんの方に広めることで感謝の意を表したいと考えております。

医療法人静仁会 静仁会静内病院

病院長 井齋偉矢（漢方内科、総合診療科）

お問い合わせや研修希望は free_radical_savenger@ybb.ne.jp まで